花と緑と笑顔の町をめざして
〈町の花づくりグループ・蒲〉

市街化が進み自然が失われつつある蒲地区を、花づくりを通して住みよい町にしようと五十七年に誕生。

発足当時二十八名だった会員も、今は二十代から七十代までの男女百八十名にふくらんだ。土に親しみながら隣から隣へと交流の輪を広げよう、みんなの心にも花をいっぱい咲かせようと、地域ぐるみで花づくり運動を続けている。

町の木、町の花を指定して育てることから始まり、公共施設の花壇作り、各家庭のプランター設置、記念植樹、一人暮らしの老人に鉢植贈呈等、運動は非常に活発である。

連絡先　浜松市神立町136の2
電話〇五三四(61)一三〇五
代表者　鈴木悦子

生産者と消費者が手を結んで
〈藤枝市 無農薬茶の会〉

化学肥料と農薬づけの土に不安を抱き、土を守ることから始まった茶作り。発足後九年経た現在、生産者九名、消費者百六十名と、安全な食物を求める仲間たちの輪は年々着実な拡がりをみせている。〝安全で良いものを安く〟をモットーに、価格も発足以来据え置き。

月一回の定例会の他、講演会等も開き、会員たちは話し合いや学習を続ける。又、毎年五月には「お茶つみ民宿」が催され、生産者と消費者の交流を深める場ともなっている。

茶のほかに、みかん、筍、露地野菜、卵も扱っている。

連絡先　藤枝市滝沢一三一五―一
電話〇五四六(39)〇〇三三
代表者　杵塚敏明

静岡にもこんな女性達が
〈しずおか女性のつどい〉

様々なグループのリーダー的な女性が集まり、その声を社会へという目的で昭和五十九年四月に結成され、現在会員数二十五名。婦人問題に関心が高く、行動力のある意欲的な女性達が集まっている。

昨年は婦人問題講演会を聞いて話し合いを持ったり、全国婦人団体研究集会へ出席した会員の報告会を開いて、婦人問題に対しての造詣を深めてきた。

今年はさらに、婦人の地位向上へむけて、積極的に啓発活動等もしていきたいと、大きな目標に向って着実な歩みをみせている。

連絡先　静岡市上足洗三丁目四―一
電話〇五四二(46)〇〇〇七
代表者　石川千鶴子

農作業着づくりで広がる輪
〈はまゆうの会〉

お茶と稲作を主とした専業農家の若い主婦が、新素材で働きやすい農作業着を考案し、地域に広め喜ばれている。五十七年に五人で発足。去る七月農協婦人東海北陸リーダー研修会で、活動事例発表をして大好評を得た。

はじめは、若妻学級で料理や手芸又、指導員のもとに茶園の土壌調査をしていた。暑い夏の防除作業には少しでも軽くて涼しく水切れのよいものをと考えたのが会のきっかけ。周囲の協力を得て、機能的なヤッケや軽快なつりズボン、色鮮やかな田舎ドレス等、農作業着作りを通じてコミュニティーの輪が広がっている。

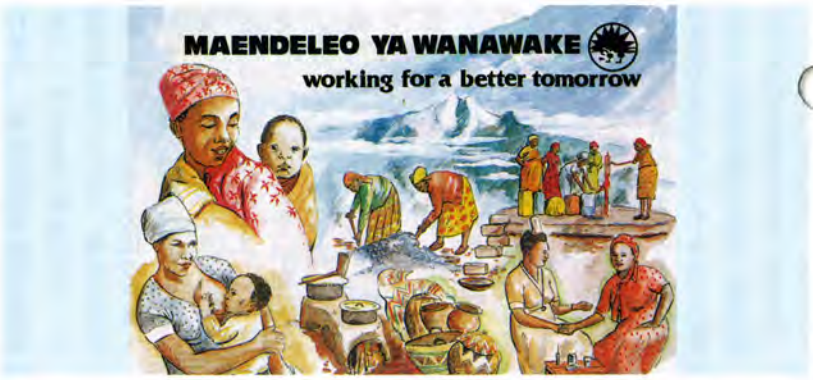
連絡先　沼津市石川四五二
電話〇五五九(66)四三九二
代表者　勝又静子

ナイロビのNGOフォーラムに参加して

佐藤和子

この七月、「国連婦人の十年」最終年世界婦人会議と同時に、ケニアの首都ナイロビで開催された民間フォーラムに参加しました。私にはアフリカは初めての土地でした。

開催地がアフリカだったせいでしょうか、今度のフォーラムにはアフリカ各地から参加した女性の姿が目立ちました。なかでも、地元ケニアの女性たちが、フォーラムの組織や運営の裏方として活躍しているのが印象的でした。なにしろ百五十か国から一万五千人近くもの人が集まってきたのですから、会場はどこも満員、行き場のない人がウロウロしているようなこともありました。でもそこは女の遣り繰り才覚で、会場のナイロビ大学キャンパスの美しい芝生を即、交流の場とし、各国の女性が思い思いに輪になって話し合いの仲間をつくり、「まあ、少し座って話しをしていらっしゃいよ」みたいな雰囲気です。



私が、ケニア最大の婦人組織「マエンデレロ・ヤ・ワニワケ」(スワヒリ語で婦人の友情と連帯という意味)と、ケニアの女性の活動のいくつかについて紹介されたのも、そのようなうちとけた出合いを通じてでした。

この婦人組織が作られたのはケニアの独立運動(ケニアはかって英国の植民地でした)を通じてですが、現在では、経済発展という国全体の目標に足並を揃えて、婦人の経済活動、とりわけ、農村部の女性の経済活動の進歩と向上のためにいろいろな活動を進めています。

ケニアは農業国ですので、人々は主に農業に従事し、農村で生活しています。農村の生活水準はまだまだ低いのです。「わが国の婦人問題は、ふたのついた鍋の普及とかまどの改善です」とのことで、農村の女性たちは、まだ、野外に石を寄せただけのかまどに、たった一つしかないふたなしの鍋をかけ食事を作る。これでは栄養のバランスのとれた食生活ができない。そこで、婦人組織がリーダーを養成して、農村に派遣し、かまどづくり等さらには食生活向上のための情報活動やトレーニングを行います。一方、農村の女性も生産を増し高収入があげられるような活動を積極的に工夫しています。

ケニア内陸部の乾燥地域では、夏の間は耕作できません。そこでこの時期をのりきるため、女性たちが協力してお金を貯め、共同出資による養鶏場を経営し始めました。八年前に五十人だった参加者も、現在では一〇〇人となり、毎年、土地を少しずつ買い増しては事業を発展させています。

このほか、この婦人組織は、女性が義務教育を終了できるよう条件を整えたり、母子保健教育や施設づくりをすすめるなど、婦人問題の具体的解決のために文字通り奮闘しています。

アフリカをはじめ発展途上国はいずれも貧しさに悩んでいますが、国全体の発展をめざして、男女両性が共に協力し合って働いています。

男女平等の社会参加が、理念ではなく、社会が現実に必要としていることなのです。

女性が働くことを通じて自分たちの手で、自分たちの生活を建設している姿は大変感動的でした。

筆者　株式会社ソナティエイト代表、「婦人のための静岡県計画」(仮称)策定委員、今夏ナイロビのNGOフォーラムに参加

今年は「国連婦人の十年」の最終年

「平等・発展・平和」を目標に1976年(昭和51年)からスタートした「国連婦人の10年」は、今年で最終年を迎えました。この10年間の取り組みの成果を振り返り、残っている課題への取組みについて検討する節目の年であるといえます。

ここでは「国連婦人の十年」「女子差別撤廃条約」とは、を概略的にふれてみたいと思います。

なお、この十年の国と県の歩みと成果については次号で詳しく述べたいと思います。

◆「国連婦人の十年」とは

今から13年前の一九七二年（昭和47年）、第29回国連総会は満場一致で一九七五年(昭和50年）を「国際婦人年」として、男女平等の推進、経済・社会・文化の発展への婦人の参加、国際友好と協力への婦人の貢献を目標に世界的な行動を行うことを決定しました。

そして、一九七五年(昭和50年)の「国際婦人年」には「平等・発展・平和」のスローガンのもとに、メキシコシティーに世界一三三か国の代表が集まり「国際婦人年世界会議」が開かれ、婦人の地位向上にむけて熱心な計議をかさね、「世界行動計画」が採択されました。そして、その年の12月の第33回国連総会で、一九七六年(昭和51年)～一九八五年(昭和60年)の十年間を「国連婦人の十年」とすることが宣言され、世界各国の政府、民間団体はともに手をとりあいながら、婦人の地位向上のために取り組むことになったのです。

わが国も、昭和50年9月に内閣総理大臣を本部長とする婦人問題企画推進本部を設け、昭和52年には「国内行動計画」を56年には「国内行動計画」の後期重点目標を定め、「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」の批准のための条件整備、婦人に関する施策の推進に努めてきました。

そして、本年六月二十四日、批准承認案件が国会で可決され、翌二十五日、外務省において来日中の国連事務総長に批准書が寄託されました。

◆「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」とは◆

国連は、世界の女性の地位向上が遅々として進まない状況に照らし、一九六六年の第22回国連総会で採択した「婦人に対する差別撤廃に関する国際連合宣言」を拘束力の強い新たな国際的な法律文書にすることを目指して、「婦人の地位委員会」で総括的な条約の作成づくりを検討し、各国の意見をとり入れて起草作業をすすめました。

こうして生まれた女子差別撤廃条約案は、一九七九年第34回国連総会において、賛成一二〇、反対〇、棄権一一で採択されました。

この条約は、前文と本文六部にわかれ、三十条の条文から成っています。

前文には、女性の人権と男女平等に関する理念がうたわれています。そこでは「婦人に対する差別は、権利の平等の原則及び人間の尊厳の尊重の原則に違反するもの」であり、また「社会及び家庭における男子の伝統的役割及び婦人の役割の変更が、男女間の完全な平等の達成に必要である」としています。

この「女子差別撤廃条約」は、戦後国際的に大きく取り上げられるにいたった人権問題を包括的、一般的に規定したものであり、現段階では、全世界の人々にとっての憲法ともいうべき歴史的文書だといえます。

浜松市　鈴木節子　40代

男と女の役割分担をなくそう、と盛んに言われるようになった。時代の流れということもあるだろうが、能力的に差はほとんどないことを考えればこれは当然のことだと思う。

しかし、肉体的に男と女の違いがあるかぎり、根本的な所での男らしさ、女らしさは失いたくないと思う。それがあることで、人間社会に潤いが生まれるのではないかと思う。

静岡市　前田由紀子　20代

性別役割分業意識の変革というのはとても難かしい課題だと思います。自分自身の日常の中にも問題が沢山あると反省させられました。又、我が子には「男だから」「女だから」と言いたくないので、そのためにも尊敬しあい協力しあう家族になりたいと思います。

最近、全国的にも家庭科男女共修の動きが高まっている中で、静岡県ではどのようになるのでしょうか。

「婦人のための静岡県計画」が、お題目だけに終わらないようにと願っています。

下田市　土屋恭子　30代

女性の社会参加が盛んな今日。現在三人目の子が幼稚園児である私は、あえて専業主婦として、子育て充実期。

小三の長男は、長女よりも台所への出入りが多く目玉焼きが得意。しかし無意識のうちに男だから、女だからとしつけている自分に「ねっとわあく」を読んで思わずはっとしました。

富山市　杉浦慶子　40代

県の婦人情報誌としては、啓発もあり、開かれた県民性がうかがえます。

婦人のためと唱えている本誌を、男性にはどの様に受けとめられているかを問うのも、新しい展開をもたらすかもしれません。

沼津市　稲葉皆枝　40代

ラジオ・テレビからの情報の洪水で考える時間すら与えてくれない。新聞全面を読むほど余裕もない。と言うよりは一介の主婦には少し難かしい。

しかし、はじめて手にした「ねっとわあく」は温かく、優しく私の目の高さで読み考えることができました。

人生の折返し地点に達し、視野を広め社会から取残されないよう、しっかりとネットにつかまっていなければ…。

本の紹介

「働く女たちの時代」　原ひろ子・杉山明子編

時代の流れは女性の活躍の場を家庭の中に留めることなく社会へと拡大させた。仕事と家庭との両立をめざして、さまざまの角度から考える本音の本。

日本放送出版協会　七五〇円　（M・K）

「書きたい女たちへ」　田中喜美子著

書くことにより自分自身を見つめてみませんか。書くことの意味、基本、こつが丁寧に説かれ、文章添削例も豊富。アマだけでなくプロをめざす人にも。

径書房　一、六〇〇円　（T・S）

「育てるものの目」　津守房江著

子どもの行動の意味を深く考え、いつもその子を肯定的にとらえている。愛情あふれる母親の見方が数多く書かれている。子育て中の母親の心をほっとさせ、子どもを違った視点でとらえることができる。

婦人之友社　九〇〇円　（Y・M）

「女たちの挑戦」　宮野　澄著

女たちがどうして仕事に挑戦し、生き生きと生活しているのか、女の時代といわれる中で、女性の活性化に成功した西武セゾングループの経営ノウハウとは。

講談社　一、二〇〇円　（T・M）

「女の老い支度」　重兼芳子著

老いは急激にくるものではなく、しのび足で訪れてくる。残された年月をどう生きるか、自分への問いかけから始まった向老期の女の心意気が伝わる。

海竜社　一、一〇〇円　（K・S）

60年度 編集員紹介

PTA広報紙づくりに熱中し、その余熱のあるまま「ねっとわあく」の編集に参加。立場の違う多くの人々との出会いの中から素直に現在の自分をみつめ、「わたし流生きがい」を探していきたい。
魅力ある婦人情報誌にする為に努力したい。

◇

精神的、経済的自立を望みながら、いざとなるとためらってしまうふがいなさ。これをシンデレラ・コンプレックスというのでしょうか。今年は「国連婦人の十年」最終年。しかし、私自身の婦人年はこの情報誌作りを通して、今スタートしたばかりです。

◇

子育てを通して、多くの人との出会いがあった地域活動の日々。主婦専業でも問題意識を持ってながめる社会は手ごたえがあり厳しい。妻・母・女としてだけでなく人間として考えていきたい。優しさや温もりを大切にしながら……。

◇

あれもこれもと手を出して、きりきり舞いしている状態なのに、好奇心を押さえ切れずに、未経験の分野に挑むことになった。
女性の抱える問題を明らかにし、今の状況を少しでも変える力になればと、意欲満々です。

◇

地域活動をしながら淡々と過ごしてしまった日々を振り返り、多くの人から学んだことをいかしたい。家事、育児、老人介護の傍ら、又専門知識や技術をもって社会進出する女性のために、少しでも参考になる情報誌作りに努めようと意欲を燃やしています

河原みち代(45)
浜　松　市

沢辺　敏江(37)
藤　枝　市

杉山佳代子(44)
静　岡　市

村松由美子(36)
静　岡　市

三井　智子(52)
沼　津　市

あとがき

夕暮れの台所に立ちながら、ナイロビ世界婦人会議を「遠くで鳴る鐘の音」と思わなくなった自分に気付く。机に新聞の切り抜きを集め、「女性が主体的に生きる」意味を問う。仕事も家庭も育児も介護も、女の歩んだ歴史が微妙に変化しているからこそ、今深くみつめたい。　(K.S)

男女雇用機会均等法の成立は歓迎すべきことであるが、それで今までの社会通念や女性自身の意識が変わったとは思えない。取材を通して「女は家庭を」の意識が強く残っていることも感じた。理想と現実とのズレにどう対処していくかが、今後の課題であろう。　(T.S)

就職と同時の編集会議、皆様には御迷惑かけましたが、多方面に活躍する若い方達の中で何よりの刺激剤でした。女性の社会進出は千五百万人を突破し遂に専業主婦を上回ったという。特集「女性の就労」は時代にピッタリだった。紙面の関係で取材の内容を充分紹介できず心苦しかった。　(T.M)

働く婦人が専業主婦を上回わったそうだ。働きたい、何かしたいという女性は多い。働くにしろ、専業主婦であるにしろ、自分の責任をきちんと果たし、なにげない日々の生活に問題意識の持てる感性をみがかなくては、よりよい生き方はできない。　(Y.M)

「仕事も家庭も」という新しい女の時代。女性の職場への進出は目を見張るものがあり、女性を活かす会社は伸びていると言われる。
「職場の花」が「実る花」になりつつある今、女性の職業観は人生の一部分でなく、一生に結びつくものという志向に変化しつつあるようだ。　(M.K)

婦人のための情報誌「ねっとわあく」
第　7　号
昭和60年10月
編集・発行　静岡県生活環境部婦人青少年課
〒420　静岡市追手町9番6号
☎ 〈0542〉21－2137